

フレデリック・ダグラス著

『私の隷属と私の自由』（一八五五年）

第一章～第二章*

堀 智 弘

【第一部】 奴隷としての生活

第一章 作者の幼年時代

生まれた場所～地区の性質～タツカホー～名前の由来～チョップ
タンク河～家系図～時間の数え方～祖父母の名前～その地位～と
りわけ尊敬される祖母～「生まれつきの幸運」～さつまいも～迷
信～丸太小屋～その魅力～子供たちの別離～作者のおばたち～そ
の名前～奴隷であることを初めて知る～「ご主人さま」～子供時
代の悲しみと喜び～奴隷少年と奴隷所有者の息子の幸福の比較

メリーランド州東岸のトールボット郡の郡庁所在地であるイー

ストンの近くに、土地が疲弊しきって砂っぽく砂漠にも似た景
観、いたるところで農場や柵が荒廃した様子、住民たちの窮乏し
生気のない性質、そして悪寒や熱病の蔓延ということ以外に特筆
すべきところのない人口のまばらな小さな地区がある。

この顕著に将来性を欠き、真に飢餓に苛まれた地区の名前は
タツカホーといい、その名前は黒人白人問わずすべてのメリーラ
ンド州民に知れ渡っている。この名前がこの地域にあたえられた
のは、おそらく最初は単に嘲つてのことだった。あるいは、わた
しが聞き及んだように、その初期の住民のだれかが自分のもので
はない鋤を盗む——すなわち鋤を盗る——というちよつとした卑
しき行為に及んだがために、この名前が付けられたのかもしれない。
東岸の人たちは通常、「盗った」という単語を「タツク」と
発音する。したがって、「鋤を盗った」はメリーランドの話し言
葉では「タツカホー」である。しかし、起源がなんであれ——そ

してこれについてわたしが確信に達することはないのであろうが——この名前は問題の地区に定着した。そして土地の不毛さと住民の無知と怠惰と貧しさゆえに、この名前は軽蔑と嘲りをもって口にされないことがめつたにない。荒廃と零落があらゆるところで明白であり、この場所を流れ、住民たちに豊富なシャッド¹やニシン、そして多くの悪寒と熱病をもたらすチョップタンク河がなければ、まばらな住民たちはずっと前にここを去っていたであろう。

ことわざどおりに怠惰で酒に溺れた²底辺の白人たちに囲まれた、この活気も味気も節度もない地区もしくは近隣で、鋤を振り上げるたびに「ああ、なんの益があるうか」と問うているように見える奴隷たちのあいだに、わたしは——わたしの咎によるものではないが——生まれ、子供時代の最初の数年間をすごした。

ある人についてなにかを知ることが確かに重要であるとしたら、その人がどこで生まれたかは常に重要な知るべき事実であるという理由で、読者はわたしが生まれた場所についてはかなりご容赦していただけるであろう。わたしが生まれた時期については、場所³に関するほどはつきり述べることができない。また、わたしの両親に関しても、お伝えできることは確かにあまりない。家系図は奴隷のあいだでは盛んではないのである。ここ北部では多少なりとも重要な人物、時として父と呼ばれている人物は、奴隷の法と実践において文字通り廃止されている。この所論に例外があるとしても、それはごくまれである。自分が何歳なの

1 北米の重要な食用魚。

2 「大酒を飲み、身を持ち崩す者は貧乏になり、惰眠をむさぼる者はほろをまとう。」(箴言 23:21)

か言うことのできる奴隷にわたしは会ったことがない。一年のうちの月についても、一月のうちの日についても、なんらかのことを知っている母奴隷はほとんどいない。母奴隷たちは、結婚と誕生と死が記された家族の記録をとっていないのである。彼女たちは、春の時期、冬の時期、収穫期、植え付けの時期といったもので自分の子供の年を計っているが、こうしたことはすぐにどれがどれだかわからなくなり、忘れ去られてしまう。ほかの奴隷たちと同じように、わたしも自分が何歳なのかわからない。この欠如は幼少期のわたしのひとつの悩みの種であった。大きくなると、奴隷が自分の年齢を知ることにつながるかもしれないどんな質問も、わたしの主人——これは主人一般に当てはまることであるが——は許さないということを知った。そのような質問は忍耐力のなさ、そして出すぎた詮索心の証拠とさえみなされるのである。しかし、あとでその時期を知るに至ったいくつかの出来事から、自分は一八一七年に生まれたと思っ³ている。

わたしが今でも覚えている人生最初の経験は——ほんやりとしか覚えていないが——祖母と祖父であるベッツィーとアイザック・ベイリーの家族に始まった。二人はかなり年がたっており、当時住んでいた場所で長年生活を送ってきた⁴。二人は近隣でも

3 実際にはダグラスが生まれたのは一八一八年二月であり、本作執筆時には三六歳であった。ダグラスの生年月日については Dickson J. Preston, *Young Frederick Douglass* (Johns Hopkins UP, 1980), pp. 31-34 を参照。

4 ベッツィーは一七七四年生まれ、アイザックは一七七五年以前の生まれなので、一章と二章で物語られている出来事があった時期には二人とも四十代半ばから後半であったと考えられる。

古くからの移住者とみなされており、特に祖母は、状況から考えて、奴隷州のほとんどの黒人が受けていたよりもはるかに多くの尊敬をもってみられていたとわたしは推測している。彼女は優れた保母であり、シャツドとニシンを獲る網を作る名人であった。祖母の作る網はタツカホーだけでなく、近隣の村であるデントンやヒルズボロでもたいへんに需要があった。祖母は網を作るのが上手いだけでなく、上述の魚を獲るための幸運に恵まれていることでもいくぶんか有名であった。わたしは祖母が半日も水に浸かっていることを知っていた。祖母は同様に、苗木となるサツマイモを保存する際にも近所のほとんどの人たちよりも用意が周到であり、彼女は——注意深く節度のある人が無知で不注意な人々の集団のなかにいればだれでもそうなるように——「幸運」をもって生まれたという評判を享受することになった。祖母の「幸運」は、サツマイモを掘りおこす際には水分を多く含んだ根を傷つけないようにし、冬期には彼女の小屋の炉床の下に実際にサツマイモを埋めることで、霜の影響を受けないようにするにあたって、人並み外れた注意を払っていたお陰であった。サツマイモを植える時期には、彼女が親愛の情をもって呼ばれていたとおり、「ベティばあさん」に苗となるサツマイモを丘に置いてもらうためだけに、あらゆるところからお呼びがかかっていた。というのも、もし「ベティばあさんがサツマイモを植える際に触れさせずれば、かならず大きく育つ」と迷信で信じられていたからである。この名声は彼女とその周りの子供たちにとってたいへんに有利なものであった。タツカホーには生活を送る上で有益なものはいくつもなく、祖母は贈り物というかたちでそうし

たものすべてに与っていた。彼女が植えた後に質のよいサツマイモが獲られれば、植えてもらった人たちは彼女のことを忘れ去ることとはなかった。そしてほかの人たちが彼女を心に掛けていたように、彼女はその周りにいるお腹をすかせた子供たちを心に掛けていた。

祖母と祖父の住処には人目を引くようなものはほとんどなかった。それは粘土と木とわらでできた丸太小屋もしくは小部屋であった。それは遠くから見ると、西部諸州で最初の入植者たちによつて建てられた小部屋に似ていた——それらに比べれば、こちらはずっと小さく、広々してもいなければ、しっかりした造りでもなかったけれど。しかしそれは、子供であるわたしから見れば、居住者の快適さと便利さを増進するべく見事にあつらえられた立派な建物であった。頭上の垂木に軽く投げ掛けられた数枚の荒作りのヴァージニア式の柵の割り材⁵が、床と天井と寝台架という三つの目的を果たしていた。たしかに、この上層階にははしごを使わなくてはたどり着けなかった——しかし、上に登るのははしご以上によいものがあるだろうか。わたしにとって、このはしごは実に素晴らしい発明であり、わたしがその横木の上で喜んで遊ぶときには、ある種の魅力を帯びていた。この小さな小屋にはたくさんの子供たちがいたが、その数ははつきりとは言えない。祖母は——畑仕事をするためには年をとりすぎているからなのか、それとも若い頃にお役目をとても忠実に果たしたからなのか——決まった居住区域から離れたところにある一軒の小屋に住

5 丸太を縦に割って作った割り材。

み、自分自身を養うことと子供たちが必要とする世話をすること以外に仕事を押し付けられないという特権を享受していた。彼女は明らかに、そういう生活ができることをたいへんな幸運だと考えていた。子供たちは彼女自身の子供ではなく、彼女の孫たち——彼女の娘たちの子供たち——であった。彼女は子供たちが身の回りにいて、その世話をいくらかでも焼くことに喜びを感じていた。子供たちをその母親から引き離し、ごくたまにを除いては母親が子供と会えないように、母親を遠くへ働きに出すという慣習は、奴隷制度の残酷さと野蛮さの際立った特徴である。しかしこれは、人間をいつでもどこでも野獣と同じ水準まで引き降ろすという奴隷制の主眼に合致している。それは奴隷の精神と心から、制度としての家族の神聖さというすべての正しい考えを抹消する上手い遣り口なのである。

しかし、この子供たちのほとんどは祖母の娘たちの子供であったので、家族という考えや家族関係にもなう相互の義務と利益という考えは、子供たちが——しばしば起こるように——その主人の希望以外には、子供たちに対してなんの顧慮も払わない他人の手に委ねられてしまう場合よりは、理解される見込みがあった。祖母には娘が五人いた。その名前は、ジェニー、エスター、ミリー、プリシラ、ハリエットであった。最後の娘がわたしの母親であり、彼女については読者はおいおい知ることになるであろう。

この場所で親愛なる祖母と祖父と一緒に住んでいたの、わたしは自分が奴隷であるということを知るまでに時間がかかった。それを知る前にほかの多くのことを知った。わたしにとって、祖

母と祖父は世界で最も偉大な人たちであった。そして二人の小屋で——わたしはこの小屋は二人のものだと思っていた——一緒にかなりぬくぬくと生活し、わたしやほかの子供たちに対する権威といったら祖母の権威以上のものを知らなかったため、しばらくのあいだ、わたしの心を騒がすようなことはなかった。しかし、体が大きくなり、年齢を重ねるにつれ、あの「小屋」とそれが立つ土地が、親愛なる祖父母のものではなく、遠くに住んでいて、祖母が「オールド・マスクご主人さま」と呼んでいる人⁶のものだということ

をだんだんと知るようになった。さらに、家と土地だけでなく、祖母自身とそのまわりの子供たち全員が、祖母があらゆる尊崇の様子をもって「ご主人さま」と呼ぶ、この謎に包まれた人物のものであるともっと悲しい事実も知るに至った。このように早くから、暗雲がわたしの行く道に垂れ込め始めた。いったんこの道に入ると——悩みは重なるものである——わたしの無邪気な心にとつて、さらに嘆かわしいもうひとつの事実を知るまでに時間はかからなかった。その名前が恐れとおののきをもって語られているようにみえる、この「ご主人さま」は、子供たちが祖母と一緒に暮らすのを限られた期間だけしか許しておらず、実は子供たちは、十分に大きくなりしだい、すぐさま引き離されて、件の「ご主人さま」と一緒に暮らすことになると言われたのである。これらはたしかに痛ましい発見であった。わたしは小さすぎたので、この情報をもつ意味すべては理解できなかったし、幼年期の日々のほとんどをほかの子供たちとはしゃぎまわって過ごし

6 ダグラスの最初の所有者であるアーロン・アンソニー（一七六七—一八二六年）のこと。

ていたが、一抹の不安の影がわたしに差し掛かったのである。

この遠くにいる「ご主人さま」の絶対的な力が、冷たく残酷な鉄器のように、わずかにその先端でわたしの若い精神に触れたことで、遊びの後や休息時にわたしが考えをめぐらすべきなにかをもたらした。たしかに祖母はその当時、わたしにとって世界のすべてであった。したがって、ある程度の期間にわたって彼女から引き離されるといふ考えは、歓迎できない侵入者という以上であった。それは耐えがたかった。

大人たちに悲しみがあるのと同様に、子供たちにも子供なりの悲しみがある。子供たちとの交友にあたっては、このことを忘れないのがよいであろう。子供の奴隷は子供であり、一般法則の例外ではない。祖母から引き離されて、めったにもしくは二度と会えなくなる可能性は、わたしを悩ませた。その名前が決して愛着をもってではなく、常に恐れをもって口にされるのを聞いてきた、あの謎に包まれた「ご主人さま」と一緒に暮らすことになっているという考えに、わたしは恐怖した。このことは、わたしの子供時代の数ある悲しみのなかでも最もつらいものであったと振り返ってみて思う。祖母よ！祖母よ！あの小屋と彼女が目を配っていた愉快な一団もあるが、とりわけ一時間でもないわたしたちを悲しませ、戻ってくると思はせたあの人よ——あの人とあの素晴らしい家を離れるなどどうしてできようか？

しかし、子供時代の悲しみは、その後の人生での快樂と同じように、束の間である。子供の心に消すことのできない悲しみを一筆で書きつけることは、奴隷制の力さえ及ぶところではない。

「子供時代の頬を流れる涙は

薔薇の花が宿す朝露のよう——

夏の微風が次にきて、

茂みを揺らすと——花は乾く。」⁷

結局のところ、放って置かれる子供の奴隷と世話を焼かれ可愛がられた奴隷所有者の子供が感じる満足の程度にはわずかな違いしかない。(すべて公正たる神)の精神は幼き者たちのために慈悲深く天秤を掲げてくれているのである。

奴隷所有者は、子供が無益な生活を送ることに對してなんら危惧を抱くべきところがないため、残酷な責め苦を容易に控えることができる。したがって、そのかわい体を寒さと飢えが貫くことがなければ、奴隷少年の生涯の最初の七年か八年間は、奴隷所有者の最も選り好みされ可愛がられている白人の子供とほとんど同じくらい、甘美な満足で満たされている。奴隷少年は、彼の白人の兄弟に降りかかってきて悩ますような多くの苦勞を逃れている。彼には、ふるまいの礼儀正しさやその他のどんなことについても説教を聞く必要がなかったにない。彼はナイフやフォークを使うことがないので、それらの使い方が間違っていたり、不器用であったりしても叱られることがない。彼は土床の上で食事を摂るので、テーブル掛けを汚したと行って叱責を受けることもない。彼は汚したり破いたりできる服をほとんどもっていないので、遊びや遊戯で自分の服を汚したり破いたりしてしまうという不運に

7 サー・ウォルター・スコット『ロークビー』（二八二三年）、第四歌、第十一連。

遭うこともない。彼は無作法な小さな奴隷にすぎないので、上品な小さな紳士のようにふるまうことはまったく期待されていない。このように、すべての束縛から解放されたことで、奴隷少年は、その生活と行動において真の少年になることができる。その少年としての本性に促されるままに行動し、少しもその体面を傷つけることもなければ非難を受けることなく、馬や犬や豚や鶏の奇妙なふるまいや気まぐれな行為を次々と演じてみせる真の少年である。彼は文字どおりしたい放題である。子供部屋でちょっとした美詩文を学ぶ必要もなく、自分がどれだけ賢いかを示すために、叔母や叔父や従兄弟たちにちよつとしたうまいスピーチをする必要もない。年長の奴隷少年たちの重い蹴りや拳をうまくかわすことさえできれば、アフリカのヤシの木の下にいる異教徒の少年と同じくらい幸福に、楽しいいたずら遊びに興じて走りまわることもできる。たしかに、時として、主人にばったり会ってしまうと——彼はこれ避けることを早くから学ぶのであるが——自分が今は「大目に見て」もらっているのであって、やがては「身の程を知る」定めになっていることを思い出させられるのである。この脅しはすぐに忘れられる。影はすぐに消え去り、われらの黒色の少年は、自分に合うやり方で、真に自由に、土埃のなかを転げまわったり、泥にまみれて遊び続ける。もし彼が泥や土埃で不快さを感じたとしても、邪魔する者などいない。わざわざ服を脱ぐこともなく、服を濡らす心配もなく、川や池に飛び込むことができる。彼の小さな麻くず地のシャツ——というのも彼が身につけているのはこれだけなのだ——は簡単に乾くし、彼の肌と同じくらい水洗いが必要なのだ。彼の食べ物はきわめて粗末

なもので、大部分はトウモロコシ粥であり、それはしばしば牡蠣の殻に載せられて木製のお盆から彼の口まで運ばれる。天気が暖かいときには、遮るもののない野外で明るい陽光のもとで日中を過ごす。彼が眠るのはいつでも風通しのよい部屋においてである。血をきれいにしたり、食欲を増進させるために、粉薬を摂る必要に迫られたり、糖衣をかぶせた小さな錠剤を服用するために賃金をもらう必要に迫られることもめったにない。彼は砂糖菓子を食べないし、棒砂糖のかたまりも口にせず、いつも自分の食事に満足している。だれも彼が泣くことを好まないで、彼はごく少ししか泣かない。彼は自分の傷を尊ぶようになるが、それも少しかである。というのも、ほかの人たちがそのように彼の傷を尊ぶからである。一言でいえば、彼はその生涯の最初の八年間の大部分において、元気がよくて、愉快で、騒がしく、幸福な少年であり、苦労はアヒルのお尻に降りかかる水のようにしか降りかからない。そして、わたしが現在思い出せるかぎりでは、そのような少年が、今わたしが物語るうとしている奴隷制下の生活をおくる当の少年であった。

第二章 作者、その最初の家から引き離される

「ご主人さま」なる名前の恐怖くロイド大佐の農園くワイ河くその名前の由来くロイド家の地位く家庭の魅力くうつつけの捧げ物くタツカホーからワイ河への旅くご主人さまの家に到着後の光景く祖母の立立く兄弟姉妹との奇妙な邂逅く慰めの拒絶く甘美な眠り

第一章で、われらの小屋の住人たちにとっての恐怖の対象として「ご主人さま」という不吉な名称で言及したあの謎めいた人物は、実はなかなかの人物であった。彼はタッカホーにいくつも農園を所有しており、エドワード・ロイド大佐の本拠農園の使用人頭であり、自分自身の農園に何人も監督を雇って、ロイド大佐の農園の監督たちに指示を出していた。この本拠農園はワイ河——この名前はロイド家発祥の地であるウェールズにおそらく由来している——沿いに位置している。彼ら（ロイド家）はメリーランドの由緒ある誉れ高き一族であり、格別に富裕である。彼らがおそらく一世紀かそれ以上にわたって住処を構えてきた本拠農園は、この州で最も大きく、最も肥沃で、最も設備のすぐれた農園のひとつである。

この農園について、そしてこの奇妙なご主人さま——人間以上で天使以下の何者かに違いない人物——について、わたしが知りうることはすべて知りたいと好奇心を抱いただけでなく、知るところを熱望したということを読者は容易に想像するであろう。しかし、わたしにとっては不幸なことに、彼についてわたしが得られる情報は、そちらに連れて行かれること——祖母と祖父から引き離され、その庇護を奪われること——に對してわたしが抱いていた大きな恐怖をただ強めるだけであった。ロイド大佐のところ

8 ロイド家はチェサピーク湾東岸最大の大農場主一族。その五代目にあたるエドワード・ロイド五世（一七七九—一八三四年）はメリーランド州知事や連邦上院議員を歴任した。大佐という呼称は、ロイド家の歴代のエドワードは家督を継ぐと民兵団の大佐に就任したことによる。

行くことは明らかに大層なことであり、その場所を見てみたいといういささかの好奇心もないわけではなかったが、どんなに甘言を用いられても、そこに居続けたという気持ちがわたしのうちに湧きあがることはなかった。実のところ、小屋を離れることへの恐怖があまりに大きかったので、永遠に小さいままでいられたらと願ったほどであった。というのも、大きくなればなるほど、小屋に留まることのできる時間が短くなってしまうことを知っていたからである。割り材の床と上階の割り材の寝台架、下階の土床、窓のない側面、そしてあの実に巧妙な工夫のたまものである残りの部分すべて、階段がわりのはしご、祖母が霜から守るためにその下にサツマイモを置いていた暖炉の前に巧妙に掘られた穴、それらのあるあの古い小屋こそがマイ・ホーム——わたしのものである唯一の家——であって、わたしはこの家とそれに結びついたすべてのものを愛したのである。そのまわりにある古い柵、その近くの森の端にある切り株、その上で走り、飛び跳ね、遊ぶリスたちが、わたしの関心と愛着の対象であった。小屋の真横にはまた古い井戸があり、その堂々と空を仰いだ上げ下げ棒は、かつての立木の枝のあいだにうまいこと備え付けられており、絶妙なバランスがとられていたので、わたしは片手だけでそれを上下に動かすことができ、助けを呼ぶことなく、自分で水を汲むことができた。世界のほかのどこで、このような井戸を見つけることができようか？どこで別のこのような家にめぐりあうことができようか？この場所の魅力はこれだけではなかった。祖母の小屋からほど遠くない小さな谷にはリーさんの粉ひき場があり、そこにはトウモロコシを挽いてもらうために、ひとびとがし

ばしば大拳してやってきいていた。それは水力の粉ひき機だった
が、わたしが土手に座って、その粉ひき機とその重々しい水車の
回転をながめながら考え感じた多くのことを言うことはできない
であろう。水車池にも魅力があつて、釣り針と釣り糸があれば、
魚は獲れないにしても、当たりの感、触は得ることができた。しか
し、すべての娯楽と遊びのさなかにあつて、またそうしたことに
もかかわらず、自分には長くはいられず、まもなくご主人
さまの家へと呼び寄せられるに違いないという痛ましい予感に時
としておそわれるのであつた。

わたしは奴隷であつた——奴隷として生まれた——のであり、
この事實はわたしにとって理解不能であつたけれども、それは自
分が一度も会つたことのない「だれか」の意思に完全に依存して
いるという感覚を心に呼び覚まし、なんらかの理由により、わた
しはこのだれかをこの世のほかのだれよりも恐れるようになって
いた。他人の利益のために生まれたわたしは、小屋の群れの初子
として、あまりに多くの局面でその途方もないイメージがわたし
の幼い想像力につきまとつていた、あの恐ろしく容赦ない神人、に
うってつけの捧げ物としてまもなく選ばれることになつた。出発
の日時が決まると、わたしの恐れを察知し哀れんだ祖母は、親切
にも、まもなく起こころうとしている恐ろしい出来事をわたしに知
らせなかつた。出発することになつて日朝（ある夏の美し
い朝）まで、そして実のところ旅の間じゅうずっと——当時子供
だつたとはいえ、わたしはこの旅を昨日のことのように覚えてい
る——祖母はこの悲しい事實をわたしから隠していた。このよう
な慎重さは必要であつた。というのも、もしすべてを知つていた

ら、わたしは出発の際に祖母にいくぶんか面倒をかけていたに違
いないから。実際はというと、わたしはどうすることもできず、
祖母は——親愛なる女性よ！——怪訝なわたしの眼差しに対して
尼僧のごとき慎重さと莊重さで最後まで抵抗して、わたしの手を
つかんで連れて行つたのだ。

タツカホーからワイ河——ご主人様が住んでいる場所——まで
の距離はまるまる二十マイルあり、わたしの幼い足の忍耐力に
とつてかなりきつい試練であつた。親愛なる祖母が——我が記憶
に祝福あれ！——その肩にわたしを載せて（メリーランド人が言
うように）「かつぎ運ぶ」ことによつて時々休ませてくれなかつ
たら、旅はわたしにとつてあまりにきついものとなつていただろ
う。祖母は年がいつている——新たにアイロンをかけたバンダナ
のターバンのたつぷりとした優雅な鬘目のあいだからのぞく幾本
もの白髪から明らかなおり——とはいえ、まだ体力と気力に満
ちた女性であつた。その立ち姿は惚れ惚れするほどピンとしてお
り、柔軟で力強かつた。わたしが祖母にとつて重荷のようにほ
んどみえなかつた。わたしがこれ以上そんなことをしてもら
うのは男らしくないと自分で感じて、歩くと言わなければ、祖母は
もつと「かつぎ運んだ」だろう。親愛なる祖母はわたしを担ぐこ
とから解放されたとはいえ、タツカホーとワイ河のあいだにある
暗い森の一部を通り抜ける際には、わたしが彼女から完全に独立
することはかなわなかつた。祖母は、わたしが森から出てくるな
にかに平らげられまいと、拳を握りしめる力を強め、祖母の服を
つかむさまをしばしば目撃した。いくつもの古い丸太や切り株が
わたしを欺いて、野獣だと勘違いさせた。野獣の脚や眼や耳が見

える、あるいは眼や脚や耳のようななにかが見えるのだが、十分に近くまで行くと、眼は雨で白くなったこぶで、脚は折れた枝で、耳は見る視点によって耳に見えるだけということがわかった。このように早くから、ものごとを見る視点が重要だということとを学んだのだ。

日が高くなるにつれて気温は上がっていった。そして午後になつて、非常に恐れられていた旅の終着点に到着した。わたしは黒、褐色、赤銅色、ほぼ白といった多くの色の子供たちの一団のなかにいた。これほど多くの子供を見たことはなかった。様々な方角に大きな家がそびえ立ち、とても多くの男と女が野外で働いていた。このように急いだ様子や喧騒や歌はどれもタツカホーの静けさと大違いであった。新参者であるわたしは格別な関心の的であり、彼ら（子供たち）はわたしを取り囲んで笑い、叫び、ありとあらゆる奇妙ないたずらをしたあとに、外に出て一緒に遊ぶうと言った。祖母と一緒にいたかったので、この誘いをわたしは断った。わたしたちがここにすることは、わたしの将来の雲行きの怪しさを示していると感じずにはいられなかった。祖母は悲しげな様子であった。彼女はそれ以前に多くの愛情の対象を失ってきたように、またもや愛情の対象をまもなく失おうとしていた。原因はわからなかったけれども、彼女が不幸であることをわたしはわかっており、その表情から影がわたしに垂れ込めていた。

しかし、どんな未決状態にも終わりがなくてはならず、この場面でのわたしの未決状態の終わりは差し迫っていた。祖母は愛情深くわたしの頭をポンポンと叩き、良い子でいるように教え諭すと、行って他の小さな子供たちと遊ぶように言った。「あの子た

ちはおまえの親戚だよ」と祖母は言った、「行って一緒に遊びなさい。」たくさんのいとこたちのなかにフィルとトムとステイヴとジェリー、ナンスとベティがいた。

祖母は、その集団のなかにいたわたしの兄ペリー、姉サラ、姉イライザを指差した。それまでわたしは自分の兄弟も姉妹も見ることがなかったので、時々そのことを耳にし、興味津々とした関心を感じてはいたが、彼らがわたしにとって、あるいはわたしが彼らにとってどんな存在なのかを本当には理解していなかった。わたしたちは兄弟姉妹だが、それがなんだというのか？なぜ彼らがわたしに、あるいはわたしが彼らに愛着を抱くはずとされるのか？わたしたちは血縁によって兄弟姉妹であるが、奴隷制がわたしたちを他人にしまっていた。兄弟や姉妹という言葉を聞いたことがあり、この言葉がなにかを意味することは知っていたが、奴隷制はこうした言葉からその真の意味を奪い去っていた。わたしが経験しようとしている経験を、彼らはかつて経験していた。彼らはすでにご主人さまの住居について秘伝を授かっており、ある程度の同情をもってわたしを見ているようにみえたが、わたしの心は祖母にしがみついていた。親愛なる読者よ、わたしたちのあいだにこれほどまでに同情の念がなかったことを奇異に思わないでほしい。兄弟姉妹の感情をもたらず条件が不足していたのだ——わたしたちは一緒に寝て遊ぶことが一度も

9 ペリー、サラ、イライザはそれぞれ一八二三年一月、一八一四年八月、一八一六年三月生まれ。フレデリックの母親ハリエット・ベイリーはフレデリックを産んだあと、一八二〇年三月と一八二二年十月にそれぞれキティとアリアンナを産んでいる。

なかった。他の奴隷女性たちと同じように、わたしの哀れな母には多くの子供がいたが、家族はなかったのである。家族団欒は、それに伴う聖なる教えとかけがいのない愛情表現とともに、母親奴隷とその子供たちの場合には廃絶されている。「子供たちよ、愛し合いなさい」は奴隷小屋ではめったに聞かれない言葉である。

わたしは兄や姉たちと本当に遊びたかったが、彼らは見知らぬ人であり、祖母がわたしと一緒に連れて行くことなく立ち去ってしまうかもしれないという恐れでわたしはいつぱいであった。しかし、懇願されて、さらに祖母にも懇願されて、兄や姉たち、それから他の子供たちと一緒に遊ぶためにわたしは屋敷の裏に行った。しかし、わたしは遊ぶことはなく、背中を壁につけて突っ立ったまま他の子供たちが遊ぶのを眺めていた。そこに立っていると、とうとう、台所に立ち寄った子供のひとりごとかいたずらっぽく歓喜したような様子でわたしのところに駆け寄ってきて叫んだ、「フェッド、フェッド、ばあちゃん、いつちゃった、ばあちゃん、いつちゃった」。信じられなかったが、最悪の事態を恐れて、自分で確かめるために台所に駆け込むと、そのとおりだとわかった。祖母は本当に行ってしまった、もうはるか遠くにいて、「きれいさっぱり」見えなくなっていた。起こったことすべてをもうや述べる必要はない。わたしはこの発見に心はほとんどはちきれんばかりで、地面に伏して、慰められるのを拒絶して少年年の苦い涙を流した。兄と姉たちがまわりにやってきて「泣かないで」と言ってモモとナシをくれたが、わたしはそれを投げ捨て、彼らの優しい慰撫をどれも拒絶した。それまでわたしは欺かれたことはなかったのであり、祖母との別れ——永遠の別れだと

思われた——が悲しかっただけでなく、これほどまでに重大な事柄で自分に対して欺きが行われたことに怒りを感じたのである。

もう午後遅くであった。その日は興奮と疲労に満ちた日だったので、どこでどのようにかはわからなかったが、すすり泣いているうちに眠りに落ちたのだと思う。奴隷少年にとってさえ、眠りの天使の翼には癒しの効果があり、その慰めは、ご主人さまの住居で過ごした最初の夜に、どんな傷ついた心にとってよりもわたしにとってありがたいものであった。読者はわたしが、一見するとこれほどまでに瑣末で、せいぜい七歳の頃に起こったにちがいない出来事についてこんなにも詳細に語ることに驚くかもしれない。しかし、わたしは奴隷制下の自身の経験の忠実な物語を示すことを望んでいるので、当時のわたしに非常に深大な影響を与えた出来事をさし控えるわけにはいかない。加えて、これは実のところ、わたしが奴隷制の現実に最初に足を踏み入れた出来事であった。